Osaka University Knowledge Archive

Title	Gallia51号 あとがき・奥付
Author(s)	
Citation	Gallia. 2012, 51, p. 110-110
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24304
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

あ と が き

東日本大震災が発生したのは、本誌第50号刊行直後の昨年３月11日でした。被災地およびその周辺にお住まいの方々、当地にゆかりのあるみなさまに、あらためてここに心からお見舞い申し上げます。ある会員からは、震災直後の不便な生活の最中に先号が届き、「時の経過」を語る論文をひとつひとつ読み進めることが大きな慰めになったとのお便りをいただき、文学のもたらす力について思いを巡らせました。

折しも５月に一橋大学で開れた日本フランス語フランス文学会春季大会では、震災を受けて「今、フランス語フランス文学とは」と題する対話が行われました。柏木隆雄先生を含む５名の登壇者の話題は多岐に渡りましたが、おおむねみな、文学研究を、科学知・技術知の進展がもたらす一元的価値観に対する反省的視線を涵養する営みとみなす認識で一致していたと思われます。人文知は、通念が認める有用性の基準がはたして真に妥当かどうかを問う役割を負っています。その意味で、見かけの無用性こそが文学の有用性の証拠となる、というわけです。私はこれに我意を得た心もちがしました。

「無用の用」という逆説的命題は――「無知の知」と同様に――、われわれ当事者にとってはまぎれもない真理なのですが、このことを外部者に納得させるのはひどく困難です。現にこの対話の場でも、近年の大学におけるフランス語履修者減、それにともなうフランス語・文学関連ポストの削減が、ため息とともに報告されていました。多くの大学における昨今の「文学部」の改称・改編の動きも、同様の困難に根をもっているように思われます。

そんななか、聴衆のひとりであった被災地在住の会員が、悲痛な現実の詳細な報告のあとで、「今ほど文学の力が求められるときはない」と発言されたのが印象的でした。悲嘆のさなかにいる人々により添う人の力強い言葉が、広い会場全体に静かに染み渡っていくような気がしました。その場にいたおそらく全員が、みずから選んだ営みの意義を再確認したことでしょう。

本誌もまた、そのような営みのささやかな集積です。執筆者ならびに編集委員各位、編集の実務を担当する学生諸君、そして本会会員のみなさまに感謝しつつ、少しずつ末永く歩み続ける決意を新たにする次第です。

（山上　浩嗣）

GALLIA LI

2012年３月８日印刷・３月10日発行

編集発行者　大阪大学フランス語フランス文学会
代表者　和　田　章　男

〒560-8532　豊中市待兼山町１番５号
大阪大学文学研究科・文学部フランス文学研究室内
tel. & fax : 06-6850-5117
e-mail : contact@gallia.jp
URL : http://www.gallia.jp/